

# 1月の野菜相場と家計内事情

正月は一部東北を除いて穏やかな晴れの日を迎えた。昨年末より気温は低温傾向で推移し、関東では成人の日を過ぎた2日間は桜が咲くような寒中らしからぬ小春日和であったかと思いきや、大寒頃には元の寒さに逆戻りで関東では4年ぶりの大雪と東京23区内においては1985年10月以来33年ぶりの低温注意報が発令された。降雪当日は当社本店前も午後過ぎから一気に雪が積もり始め、帰宅難民を避けるべく定時前の帰宅を余技なくされた。首都圏では配送機能の麻痺が発生しコンビニや宅配サービスで欠品が起り、降雪時のインフラ整備の脆弱さが露呈した。気象が目まぐるしく変化するせいなのかインフルエンザが例年よりも流行している。そんな天候のせいもあってか、冬の野菜たちの方も作柄は思わしくない様子だ。全国的に11月からの低温の影響で軟弱野菜の代表格であるほうれん草は草丈が伸びずに黄化、関東や西南暖地のダイコンの主産地では規格外品が多く減収してしまったという嘆きの声が寄せられている。また、年末の手頃な果物の代表



本店事務所前の道路。夕方には雪国の様

である露地みかんも出回りが芳しくなく、全体的に高めの値段が付けられた。年明けからキャベツにおいては大人のこぶし大位の普段は店頭には並ばない規格も出荷対象となっており、年末では1玉160円前後であったが正月明けには298円、ダイコンは1本が350円、白菜の1/8カット品が150円という状況。昨年末の東京卸売市場における12月25日時点での平年比比較ではダイコンが225%を筆頭にレタスが220%、ハクサイが198%、キャベツが183%、ほうれん草が171%となっている。1月後半はほうれん草の価格は平年比並みに戻るだろうとの予測があるがダイコン、レタス、ハクサイ、キャベツは2月中旬頃まで高値が続くと見られている。関東地区のキャベツの主産地である銚子地区では例年より寒冷紗や保温ネット、ビニールが掛かった畑が例年より多く見かける。ある野菜生産者の話では、家計消費にかける生鮮野菜の経費割合は2%前後だそうで、一時的に価格が倍に跳ね上がっても年間経費からすれば大したことがないのにメディアは騒ぎすぎだとの意見もある。もともと、野菜の単価よりも携帯電話の月々の支払い額の方が経費的に見れば掛かっている事を考えると、笑えない現実ではないだろうか。

## 苦土・微量元素の有効利用で安定収量！

### ～愛知県田原市（セロリ・キャベツ）～

愛知県はキャベツの産地として有名だが、セロリも長野、静岡、福岡に次ぐ第4位の産地。愛知県の中でも田原市はキャベツだけでなくセロリの主産地でもある。セロリ栽培は、冷涼で適度な降雨と、排水性の良い肥沃な土壌条件が適しているといわれ、特に当地での冬季栽培は、その温暖な気候もあり適しているとされる。今回、当社特約販売店の師定園及び園中神種苗店のご紹介により、「複合苦土微量元素肥料（Ca, Mg, Si, 微量元素）」の圃場試験に同行。愛知県田原市のセロリ農家である沢辺氏に話を伺った。

沢辺氏は2.5haの土地でセロリを主にリーフレタス、ブロッコリー、スイカ（セロリ後作）を生産。周辺はご存知の通りキャベツの産地でもあるが、夫婦で切り盛りしていくにはキャベツの大規模生産

（次ページ下段へ続く）

## 地域活動報告 米庄トモエ会 20周年を迎える

去る1月23日、エムシー・ファーティコム（株）いわき工場にて群馬県特約店の有限会社米庄商店が米庄トモエ会を開催した。有限会社米庄商店は取締役会長の丸山嗣津夫氏が合資会社米庄商店より昭和58年3月に暖簾を引き継いで操業、トモエ化成拡販を目的とした小売店との研修の場を設けるべく独自にトモエ会を発足し今回で20周年を迎えることが出来た。当日は関東が大雪の中であったため一部高速道路が通行止めにより一般道が渋滞し到着までに6時間も要したが無事到着、新設した配合設備等を見学することが出来た。また、次の日は会員メンバーと現地試験報告会並びに作物毎の肥培管理についての勉強会を半日実施した。参加するメンバーは年を追うごとに年齢を重ねていっているが、30周年目指して活動継続したいとのポジティブな意見が出た。特約店が自ら主催する会合が年々縮小していく中でこの活動は貴重な。精力的な活動を祈念したい。



(前ページ下段より続く)

は難しく、比較的相場の安定しているセロリ等の作物に限定した現在の少品目に留めている。セロリは水はけが良く土壌水分の多い土質を好むことから、灌水により肥料が流亡し易く、作物の中でも肥料を多く必要とする作物である。沢辺氏はハウス内でマルチ栽培をする事で灌水および追肥回数を減らしている。他産地の福岡等では露地での2期作が主流だが、当地では殆どの農家が年1作。相場の良いセロリで2期作を行わない大きな理由は、株の肥大成長が不安定になり減収リスクが高いため。沢辺氏は相場の最も高い規格（栽培品種「コーネル619」で2L（1.9kg以上/株）の比率を高める事で年1作でも十分な収益を得ている。今年においては、冷夏・秋の長雨の影響により相場が例年の3～4割上昇しているとのこと。セロリは苗作りから収穫まで約半年かかるが、その何れの生育ステージにおいても肥培管理がデリケートな作物である。沢辺氏よりお聞きしたセロリ栽培のポイントは次の2点。



セロリ農家 沢辺氏

- ①柔らかい土づくりにより根を張らし、土壌水分・肥料成分を吸収し易い株を作る
- ②収益の良い規格（2L）の株を多く作る（同地コーネル619の場合）

圃場試験については、「複合苦土微量元素肥料（Ca, Mg, Si, 微量元素）」の使用圃場（試験区）と未使用圃場（未使用区）の収量調査を致しました。結果は、試験区の方が2L比率高く（2Lが試験区は6割に対し、未使用区は3割）、収量を得られた。また試験区は根張り、株張り向上が見られた。

次に長年「苦土微量元素肥料（Mg, 微量元素）」を愛用頂いているキャベツ農家である宮下夫妻に話を伺った。宮下氏は、キャベツを主にブロッコリー、リーフレタス、サニーレタス等を生産。7～8年前より「苦土微量元素肥料（Mg, 微量元素）」を使用して以降、微量元素関係の欠乏症が一切見られなくなり、今では全ての作物に使用しているとのこと。特にブロッコリーでは、異常気象対策として施用量を反当り1袋増やし、安定した収量を維持している。製品に含まれる様々な微量元素が効果を発揮し、収量の安定性に繋がっていると思われる。

近年、農業資材費を含むコストの低減が叫ばれており、肥料においては窒素、リン酸、加里の三要素を重視する余り、苦土や微量元素等を主とした副資材が軽視されてしまう場面が多く見られる。しかし副資材を減らす、または使わないという事は、弊害として欠乏症や病害等の発症リスクが高まっている。苦土、微量元素等の効果を再認識頂き、異常気象にも耐える健康な作物生産を目指して頂きたい。（名古屋支店）

先日の大雪も首都圏の雪の弱さが露呈しましたが、数年に一度の大雪では対策もままならないです。家の近所に大きなかまくらができていました。大人には辟易される大雪でも子供には大歓迎ですね。

編集事務局：南部、助川